

フローベールの逸話——または作家と結婚 (下)

三 浦 淳

(5)

フランツ・カフカがフローベールの逸話を好んだことは、トーマス・マンの項で触れた。マンはプロートの書いた伝記でカフカのこの好みを知ったわけだが、プロートはさらに『城』初版へのあとがきでもカフカがフローベールの逸話を好んだことを取り上げて、作品解釈の鍵にしようとしている。⁽³⁴⁾

さて、カフカはフローベール同様一生独身を通したが、フランスの巨匠と違って実生活で結婚を考えなかったわけではない。それどころか生涯に三度、それもフェリーツェ・パウアーという女性とは二度にわたって婚約をしている。しかし婚約は三度とも破棄され、結局彼は1924年に41歳を目前にして死去した。結婚は彼にとって鬼門だったのだろうか。

1913年7月21日の日記には《僕の結婚についての賛否の総括》という書き込みがある。カフカはちょうど30歳になったばかり。フェリーツェに最初の手紙を書いたのが前年の9月であり、この年の6月に手紙で求婚している（婚約は翌1914年4月）。また親友マックス・プロートがこの年の2月に結婚している。そんな中で書かれた《僕の結婚についての賛否の総括》は、1から7まで箇条書き的に結婚の必要性和不可能性を数え上げているのだが、その2番目にはこう書かれている。

全てのものが、僕にとってはただちにものを考えるきっかけになる。ユーモア風刺雑誌のいかなる冗談を読んでも、またフローベールやグリルパルツァーのことを思い出しても、夜のために準備された両親のベッドの上の寝巻を見ても、マックスの結婚生活のことも。(…)⁽³⁵⁾

《ものを考える》というのは、無論、結婚について考えるということである。カフカは、この箇条書きの他の項では、独りでいることと文学の仕事を進めることとの関係を問うている。フローベールとグリルパルツァーの両作家は、文学に打ち込んだカフカにとって、結婚と文学の関係を考える際に無視できない重みを持っていたわけだ。ちなみに『サッフオー』や『哀れな辻音楽師』で知られるオーストリアの作家グリルパルツァーは、精神病の遺伝におびえ、32歳で婚約しながらいっかな結婚せず、81歳で婚約者にとられて世を去った。

ともかく、結婚を考える若い作家が思い浮かべたのは、またしてもフローベールだったということになる。そもそも最初にフェリーツェに近づいた時、結婚という文字がカフカの脳裏に浮かばなかったとは言えまい。初めて彼女に手紙を書いたのは、7歳下の次妹ヴァリが婚約した5日後であった。

そしてフローベールは結婚を考える際のカフカに始終つきまとう。フェリーツェとの最初の婚約を破棄したのは、婚約してわずか3カ月後の1914年7月だったが、その2年後の1916年8月27日、カフカは日記にこう記している。

F〔フェリーツェ〕に葉書を出さなかったのは、弱腰、吝嗇、優柔不断、計算技術、用心深さなどの、お前の官僚的悪徳のせいなのだ。(…) それ〔自分の欠点の改善〕はお前の手の届くところにあるのだ。つまり、骨惜しみをするなということだ。(…) 見せかけの自己保護が今日のお前をほとんど破滅させてしまったのだから。F、結婚、子供、責任などに関係のある骨惜しみだけに限らない。(…) さあ、奮いたて。おのを向上させ、役人根性から手を洗え。(…) ついでにフローベールやキルケゴールやグリルパルツァーなどと自分を比較するような、あの莫迦げた錯覚も捨ててしまえ。⁽³⁶⁾

キルケゴールがレギーネ・オルセンと婚約しながらそれを破棄した一件は余りに有名だから、ここで説明する必要もあるまい。カフカは、独身を通したり婚約しながら結婚に至らなかった作家や哲学者のことを始終考えてはわが身とひき比べていたのだろう。

そのことは、フェリーツェに送った手紙からもうかがえる。1913年9月2日付け（彼女に求婚してから2カ月半後、まだ諾の返事はもらっていない段階）の手紙でカフカはこう述べる。

僕が(…)自分の本来の血族と感じている四人の人間、グリルパルツァー、ドストエフスキー、クライスト、フローベールの中で、結婚したのはドストエフスキーだけであり、正しい逃げ道を見出したのは、外的内的な困難が積みもつもってヴァンゼーでピストル自殺したクライストだけかもしれません。⁽³⁷⁾

ドイツの作家クライストもまた、いったん婚約しながらそれを破棄し、34歳で人妻と心中したのであった。

上の手紙を書く数日前、カフカはフェリーツェの父に手紙を出そうとした。

ご存知のように、お嬢さんは陽気で健康な、自信のある方で、生きていくために陽気で健康で生き生きした人間に囲まれていなくてははいけません。(…)私の全存在は文学に向けられており(…)そこから離れたら生きていけません。(…)私は無口で、社交性に欠け、気むずかしく、利己的で、ヒポコンデリーで、事実病弱です。(…)私は自分の家族、最も善良で愛に満ちた人間たちの間で、他人よりもよそよそしく暮らしています。母とはこの数年平均して日に二十語も言葉を交さず、父とはこれまで挨拶以上はほとんど話しませんでした。結婚した妹たちやその夫たちとは、別段彼らに立腹しているわけでもないのに、全然言葉を交しません。家族に対するセンスが私にはまるきり欠けているのです。

そんな人間のそばでお嬢さんが生きていけるのでしょうか。健康な乙女である性質からしても、お嬢さんは現実的で幸福な結婚生活を送るべく定められているというのに。お嬢さんは男のそばで修道院のような生活することに耐えられるのでしょうか。⁽³⁸⁾

莫迦のつくほどに正直な手紙ではある。文学に打ち込まずとも、様々な内心の葛藤を抱える青年が父母兄弟と疎遠になることはあろうが、結婚を申し込んでいる女性の父親にそっくりそれを手紙で伝えるのは、なかなか並みの神経ではできない。まるで、お嬢さんと私との結婚には反対なさった方がよいのではありませんかと言わんばかりである。カフカは何を恐れていたのか。或いは期待していたのか。おまけにこの手紙の最後で彼は、《裁決して下さい!》と相手に要請するのだ。彼の短篇『判決』を思わせるこの口ぶり。そして実際、『判決』はこの前年、フェリーツェと知り合って間もない頃に執筆されている。

つまり、手紙はカフカにとって女を誘惑する以外にもう一つの効用があったのだ。創作意欲をかき立てるという役割が。この点についてはエリアス・カネッ

ティが卓抜な分析を残しているのでここでは繰り返さないが、カネッティは実作者としての鋭い洞察力を持って、カフカの一見した弱さが持つ権力性を、そして相手女性に強要する手紙執筆がカフカ自身の小説執筆意欲を昂進させていたといういかがわしい秘密を暴き出している。⁽³⁹⁾

話を戻そう。こんな手紙を同封されたフェリーツェが、カフカの意志に背いて父に手紙を見せなかったのは、「健康な乙女」として当然の判断である。

そもそもフェリーツェは女としてどの程度魅力的だったのだろう。残されている写真からすると、後年カフカと交際したミレナやドーラと違って、男を魅きつけるような容姿とは言い難い。カフカと並んだ写真では、どこか少年のような面影を残した彼とは違って、すでに一家の主婦と見られても不思議はないほど落ちついた、悪く言えばややふけた印象を与える。カフカは彼女と知り合った頃、日記にこう書いている。

フェリーツェ・パウアー嬢。(…) 骨ばったうつろな顔、空虚さを丸出しにした顔。(…) ほとんどべちゃんこになった鼻。幾分剛い、魅力のない金髪、頑丈な顎。⁽⁴⁰⁾

無論、女性の魅力は容姿だけではないし、上で引用したように《陽気で健康》な人だったのだろう。また彼女はそもそも文学に興味を持たなかった。⁽⁴¹⁾ 結婚相手としてそういう女の方がむしろ適格だと判断する作家も少なくはない。三島由紀夫が結婚相手の条件として、《文学なんかちつとも興味をもた》ない女性、と書いていたことを思い出してみてもいい。ただ、そういう女性に手紙を書きまくり、また自分の文学への関心や、結婚後自分が文学に打ち込む条件がどうなるかといった心配事を細々と執拗に並べ立てるカフカの態度は、いささか倒錯してはいないだろうか。そうしたことに理解を持たないことこそが、「健康で陽気」であるための条件ではなかったのか。

カフカは結婚をするには熟していなかったのだろう。フェリーツェやその父への態度には、いささかも誠実さが感じられないからだ。誠実とはこの場合、結婚をためらうべき条件を並べ立てて相手につつま隠さず伝えることではない。誰でも結婚を前にして逡巡することはある。自分はこの相手にはふさわし

からぬ人間なのではないかと、マイナス材料ばかりが脳裏に浮かぶこともある。しかし結婚を申し込んだ人間はそれを表に出さずに自信のあるふりをしなくてはならない。少なくとも、不安があるにしてもその表白はほどほどにすべきだろう。これは偽善からではなく義務からであって、結婚を申し込むという行為にはこの義務がつきまとうのである。正直と誠実とはここでは対立物と心得ねばならない。結婚のこうした側面について、三島由紀夫は示唆的な発言をしている。自分の結婚後まもなく友人の結婚式の媒酌人を務めることになった三島は、次のように言う。

仲人の挨拶の文案も、ごく簡略にごく常識的にと心掛けて練習をした。(…)

さて、かういふ万人向きの文章には、古来からの約束に従った形式がつきもので、花婿は必ず秀才であり、花嫁は必ず美女である。こんな言辞は、万人にとって願はしい真実を象徴してあるので、何もそれを頭から虚偽だと云つて排斥するには当らない。

結婚披露宴の客は祝賀のために招かれた人たちであつて、本来批評家の集団ではない。かれらは「願はしい真実」を実現するために集められた証人のやうなものである。そして人々は、不幸な批評的才能を持たない限りは、裸のぶざまな真実よりは、願はしい真実のほうが好きなのだ。花婿や花嫁は、祝寿の言葉の力によつて、少くともその日一日は秀才になり美女になるのだ。⁽⁴²⁾

これは結婚披露宴の仲人の挨拶のあり方、そしてその挨拶を聞く客の心の持ちようについて述べたものであるが、意中の相手に結婚を申し込んだ人間の心構えにも或る程度通じるところがある。「願はしい真実」を語るのがこの場合の誠実さなのであって、不安材料を並べ立てるのは「不幸な批評的才能」と言わざるを得ない。

フローベールを始め、結婚しなかったり婚約解消をした作家や哲学者の名を並べるカフカには、こうした意味での誠実さや節度といったものが欠けている。理由はどうあれ、彼の最初の婚約が数カ月後に破棄されたのは当然の結末だったと言える。

書くためには確かに時間や場所が必要だ。その気さえあればどこでも書けるなどというのは外野席の無責任な評言に過ぎない。実際、カフカは学位をとった後の最初の勤め先だった「一般保険会社」を1年もたたないうちに辞め、1908

年に勤務条件のよい「ボヘミア王国労働者災害保険局」に入っている。⁽⁴³⁾しかし、ではフェリーツェとの交際に際して絶えず心配していたように、時間や場所の条件さえ整えば彼は書けたのだろうか。仮りに財産があって勤め人暮らしをしなくて済んだなら、彼は現存する作品を質量ともに上回る仕事を残していたのだろうか。実際には結婚することではなく、結婚も可能かも知れないという状態におかれることが、彼の執筆意欲をかき立てたのではなかったか。

カフカにとって、フローベールの逸話は躓きの石だったのではあるまいか。或いは、彼がマンの『トーニオ・クレーガー』を好んで、

『トーニオ・クレーガー』の新しさはこうした対立〔市民対芸術家、生対精神といった対立〕の発見にあるのではなく（ありがたいことに、僕はもうこうした対立を信じる必要はない、この対立は人をおびえさせる）、対立に対する独特の有益さをもった愛着にあるのだ。⁽⁴⁴⁾

と語ったことに引きつけていうなら、カフカはこの「対立に対する愛着」に固執し過ぎたのではあるまいか。別の言い方をすれば、カフカはこの愛着に淫したのだ。過ぎたるは及ばざるが如しというと分別臭くなるが、同じ物を愛好しているように見えても、その強さの違いは質の違いへと直結する。彼のこの態度は創作には有益ではあっても結婚という実生活には有害無益である。結婚という実生活に観念を持ち込まないのが自分の主義だ、生活に観念を持ち込むのが文学だと思っている風潮が嫌いだ、三島は『作家と結婚』の中でそう述べたが、⁽⁴⁵⁾カフカは同じようにフローベールの逸話に関わりながらも三島と正反対の方向をとった。そして、フローベールの逸話や『トーニオ・クレーガー』の芸術家対市民という対立図式に淫することは、この精神への裏切り行為とは言えないだろうか。

少なくともトーマス・マンは、兄ハインリヒの「芸術的」なニーチェ主義・ルネッサンス主義に反発するところから「芸術家」への懐疑心を養い、「芸術」に打ち込みはしても過剰に「芸術家」にならないためにこそ市民への道を発見し、結婚を選んだ。『トーニオ・クレーガー』はその彼の決心を述べた道標的な作品だが、そこで提示された「市民と芸術家」という構図がカフカによって余りに「芸術的」に利用されてしまう時、文学の用意する邪の道は遍在すると言

わざるを得ない。

そうした倒錯が女たちを惹きつけたとしても不思議はない。恋愛とは一種の倒錯に他ならず、誠実はそこにあっては退屈の種でしかなく、不誠実こそが異性をおびきよせる魅力に容易に転化する。こうしてカフカは結婚から離れ、しかし「婚約」は手離さず、文学を餌にした言葉巧みな誘惑者となる。彼が交際した一連の女性たち——フェリーツェ・パウアー、グレーテ・ブロッホ、ユリエ・ヴォホリゼク、ミレナ・イェンスカーポラク、ドーラ・デュマントは、ドン・ファン＝カフカの犠牲者、或いは共犯者だった。

(6)

この論考は三島由紀夫の結婚とフローベールの逸話で始まった。その三島が太宰治嫌いを標榜していたのは有名な話であるが（『私の遍歴時代』などを参照）、先にも引いた『作家と結婚』というエッセイでも太宰に触れている。⁽⁴⁶⁾ ここで三島は、まず母への気遣い（この頃三島の母は重病であった）から結婚したのではないかという世間の説を退け、自分は若いうちに結婚しなくてはという気持ちは昔から持っていたと述べた上で、次のように言っている。

四十までも五十までも独身でいて結婚する人はいくらでもいるけれども、男が四十近くまで独りでいると、なにかふしぎなデカダンな味がでてくるといふことだった。（…）だから僕はそういふ感じになりたくないと思っていた。

そして、自分の置かれた状況では恋愛結婚より見合い結婚のほうが適しているのだと述べた後で、作家の名声や内実と、家庭生活とが密着している場合が日本には多いが、これは好ましくないとして次のように言う。

僕は波瀾とかトラブルとかが世の中でいちばん嫌ひなたちだ。仕事にさわるやうな波瀾やトラブルを避けるためには、すべてレセ・フェール（放任主義）にする以外、生きられない。昔気質の文士、それから最近では太宰治とか坂口安吾とかいふ破滅型の文士の生き方と、僕の生き方の違ふところだ。（…）やはり同じ時代に生きている文士だし、僕の中にも太宰的要素だつてある。しかし、太宰や安

吾のやうに外側からもそれが見えてくるといふことは、いかにもいやだ。

三島が結婚の12年後に太宰と同様、自裁によって死を遂げたことはこの際措くことにしよう。しかし、では太宰は三島と異なった結婚をしたであろうか。

太宰治は周知のように39年の生涯で二回結婚をしている。最初の小山初代との結婚が破綻したあと、石原美知子との二度目の結婚は、実は三島が選んだような見合い結婚であった。国文学者・細谷博はこの結婚について、著書『太宰治』の中で「見合い結婚者・津島修治」という見出しを特に掲げて次のように書いている。

太宰治といえは、多くの人はばくぜんと、生活者というよりは無頼派、実生活を顧みぬ奔放な芸術家、あるいは恋多き男といったイメージを描くのではないでしょう。(...)しかし (...) あらためて意外とも思えるのは、最も長く保たれた美知子夫人との結婚は、他ならぬ「見合い結婚」であったということです。

見合い (...) をいわゆる恋愛結婚に対立するものとするのは、むろん (...) あまりにナイーブな見方でありましょう。見合い結婚とは男女の出会いの形式についての範疇であり、恋愛結婚とは、たぶんその内実をこそいおうとするものなのでしょう。しかしながら、世の大ざっぱな見方では、どうも見合い結婚と言えば形式ばった枠組みの中での出来事と思われ、恋愛結婚は自由な男女の出会いと見られがちです。

そして、太宰が求めたのは、まさに前者の形式だったのです。すなわち一度目の初代との「恋愛結婚」とは異なり、太宰があらためて選んだのは、信頼できる仲介者を立てて、いくつかの段階をふんでの「見合い結婚」であり、本人同士のみならず、周囲をも含めた了承をこそ求めたのです。⁽⁴⁷⁾

細谷はこの太宰の見合い結婚を《己れを立て直す起死回生の選択》と評している。市井の人たらしとした太宰は、この頃から作家活動の中期にさしかかり旺盛な執筆意欲を見せるのだというのである。そうした太宰の「選択」を、本論で幾度も引用してきた三島の、結婚というものについての考え方と比べると、驚くほど似ていると言わねばならない。実は両者はきわめて近い資質の持ち主だったのかも知れないのである。

ここで振り返ってみるなら、日本における自殺文学者が総じて見合い結婚、

もしくはそれに類した結婚をしているという事実気づく。三島は言うまでもなく、有島武郎は意中の女性がいたにもかかわらず親に反対されて結婚を断念したばかりか、それから余り時がたたないうちに親が斡旋した相手と見合いをして気に入り、あっさり結婚を決めている。芥川龍之介も東大生時代に好きになった相手がいたが、家人から反対されて一緒になることはできず、のちに幼なじみの塚本文（子）と結婚している。大正五年初め、芥川は中学時代の友人で文（子）の叔父でもあった山本喜誉司あて書簡に次のように書いた。

僕のうちでは時々文子さんの噂が出る 僕が貰ふと丁度いゝと云ふのである
僕は全然とり合はない 何時でもいゝ加減にしてしまふ 始めはほんとうにとり
合わないでゐられた 今はさうではない 僕は文子さんに可成の興味と愛とを持
つ事が出来る⁽⁴⁸⁾

つまり、家族から釣り合う相手ということで打診され、徐々に気持ちがあびいていった上での結婚なのである。その意味で、いわゆる恋愛結婚とは対極的な結びつきと言えよう。

もっとも《結婚は性欲を調節することには有効である。が、恋愛を調節することには有効ではない》⁽⁴⁹⁾という有名な芥川のアフォリズムを引くまでもなく、見合い結婚をした作家たちが恋愛から遠ざかったわけではなかった。有島が人妻である美人記者・波多野秋子と心中した事件は余りに有名だが、芥川の晩年にも女性の影がちらついているし、三島は言うならば無垢な心情を抱いた若者と心中したのだとも言えるからである。

無論、見合い結婚に物足りなくなった彼らが恋愛や心中に走ったのだと考える必要はない。これら近代日本の作家たちの結婚は時代背景抜きには判断できないからでもあるが、或る意味で結婚と恋愛とは相補的な関係にあるということになるのではないか。すなわち、結婚と恋愛を余りに直結させる思考法には無理があるということにもなる。

ここで、近代日本における自殺文学者の先駆であり、また恋愛という観念を日本に持ち込んだ当人でもある北村透谷の場合を一瞥しよう。

北村透谷には『厭世詩家と女性』という文章がある。《恋愛は人生の秘^{ひやく}鍵なり》という有名な一文で始まる評論で、人生にいかなる希望も見出せない厭世

家にあっても恋愛だけは例外であり、現世への希望を抱かしむると論じている。しかしその結果結婚に至るとどうなるかをも、透谷は論ぜずにはおかない。

男女既に合して一となりたる暁には、(…) 今迄は縁遠かりし社界は急に間近に迫り来り、今迄は深く念頭に掛けざりし儀式も義務も急速に推しかけ来り、(…) 社界組織の網繩に繋がれて不規則規則にはまり、換言すれば想世界より実世界の擒となり、想世界の不羈を失ふて実世界の束縛となる、風流家の語を以て之を一言すれば婚姻は人を俗化し了する者なり。然れども俗化するは人をして正常の位地に立たしむる所以にして、(…) 故に婚姻の人を俗化するは人を真面目ならしむる所以にして、妄想滅じ、実想殖ゆるは、人生の正午期に入るの用意を怠らしめざる基みなる可けむ。⁽⁵⁰⁾

透谷は恋愛結婚をしたということになっている。近代的恋愛を提唱した文学者として、その結婚は彼の恋愛論との文脈で捉えられがちである。しかし、彼は本当に恋愛結婚をしたのだろうか。上の文章は、彼の結婚の内実とどの程度関わりを持つのだろうか。

透谷は明治元年、つまり西暦1868年生まれである。漱石がその1年前、鷗外が6年前の生まれであることと比較すると、激動期にあってはわずか数年の差も大きな感性の差を生み出すこと、或いは親や育った地域の差が同様の懸隔を作り出すことを考慮に入れても、その特異性が際だってくる。漱石は見合い結婚であり、鷗外の二度の結婚も恋愛とはほど遠い環境でなされたのだった。

透谷は没落士族の子として生まれ、小学校卒業後は様々な職業を転々とした(この点、東大出の漱石や鷗外とは違う。透谷の「恋愛結婚」を可能にしたのはこうした経歴でもあったろう)。対して相手の石坂ミナ(美那子)は3歳年上であり、豪農である有力政治家の娘であり、当時としては珍しく高い教養を身につけた女性であった。ただし容姿はすぐれなかったとされる。その彼女には婚約者がいた。しかし透谷は周囲の反対を押し切って彼女と結婚する。ここには社会学者作田啓一がジラルを援用しつつ示した、二対一の男女関係において恋愛感情が発動するという図式が見て取れよう。⁽⁵¹⁾

勝本清一郎の分析によると、透谷のミナへの恋文は相手に知性を求める類のものであり、理屈っぽさが特徴だという。⁽⁵²⁾ 結婚後透谷は次々と文章を発表す

るのだが、その中に『厭世詩家と女性』も含まれていた。菅野聡美は、透谷の書いたもの全般には恋愛讃美や処女讃美はあっても、家庭と性欲の問題が欠落していると指摘している。⁽⁵³⁾ これは透谷の視野にこの二つの問題が入っていなかったということの意味するのか。しかし、実は彼はミナと結ばれる以前は遊郭通いの経歴があり、江戸的な遊興の世界を知悉していた。と同時に、江戸時代から明治にかけては夫婦の和合を説く言説が一般的であり、透谷の残した文章はその意味でも同時代の傾向から離反しているという。⁽⁵⁴⁾

透谷は、恋愛や処女を新しい外来思想に則って意味づけたが、恋愛に伴う性
の問題、そして結婚以降の日常生活に新たな意味づけをする論理を持ち合わせ
ていなかった。新時代の観念を生きられるという高揚感が二人を結びつけたと
しても、少なくとも透谷の側には結婚生活の場において恋愛の内実を実現する「新
しい」道徳は見えていなかったのだ。ミナの妊娠・出産のころ、彼は富井まつ
子という別の女性と再び精神的恋愛関係に陥った。そして彼女が若くして世を
去った時、透谷の衝撃は大きかった。透谷の恋愛結婚自体が何かしら重大な欠
落を含んでいたことを、この事実は暗示していよう。そして彼は漱石とは違い、
外来の新しい観念と明治の日本における日常生活との間に生じる乖離を、作品
として生きるすべも知らなかった。自殺はその必然的な結果だったのではなか
ろうか。

(7)

タイトルロールのフローベールからいささか離れてしまった。最後はこのフ
ランス作家に戻ることにしよう。まず、1946年生まれ英国作家ジュリアン・
バーンズによる『フローベールの鸚鵡』(1984年発表)を見ておきたい。⁽⁵⁵⁾

この作品の筋書きは、英国の老いた医師(=語り手)が、フローベールにつ
いて調べるためにフランスを旅する、と一応はなるだろう。しかしエッセイ風
のこの作品の筋書きを紹介することは余り生産的ではない。語り手の名も、小
説が始まって50頁余りしてからようやく出てくる。最後近くで、語り手が実は
瀕死の妻の生命維持装置をはずした人間であること、その妻が不倫に走った過
去を持ち、いわばボヴァリー夫人であったことが明かされて、フローベールに

興味を持つ語り手とその実人生が接点を見出すのが筋書きの山場であろうか。しかし語り手はクロワッセのフローベール記念館を訪ねたり、知り合った男がこの作家の未知の書簡を発見しながら焼き捨てたと聞いたりするものの、全体の脈絡を捉えるのは容易ではなく、またそれは本論考にとってさしたることではない。

フローベール・エッセイとも言うべきこの小説には、本論の導き手であるあの逸話も登場する。

フローベールの姪のカロリーヌの伝えるところによると、晩年に至ってフローベールは妻や家族を持たなかったことを後悔していたそうです。しかし、彼女の事実描写はちょっと物足りない。二人で、どこかの知人の家を訪ねた帰り、セーヌ川沿いを歩いていたときの描写です。「《あの人たちの生きかたが本当だ》と伯父はわたしに言いました。あの人たちとは、訪ねた知人の家族、可愛くて素直な子供たちのいる家庭を指して言った言葉です。《そうだ》と、伯父はもう一度、自分に言い聞かせるように重々しく繰り返しました、《あの人たちの生きかたが本当なのだ》。わたしは、伯父の物想いを邪魔しないよう、並んで歩きながら黙ったままでいました。これが最後に近い散歩になってしまったのです。」⁽⁵⁶⁾

そして語り手はこの逸話についていささかシニカルな注釈を付け加える。

フローベールは本当にそう信じて言ったのでしょうか？ ノルマンディーにいとエジプトのことを想い、エジプトにいとノルマンディーを想う質の男が反射的にいつもの悪い癖で言ったこと、それだけのことにすぎないと考えてはいけなんでしょうか。今し方訪ねた家族があのようにうまくやっていることを褒めたただけのことではなかったのでしょうか。それに、結局のところ、もし彼が結婚という制度そのものを讃えたいと思ったのであれば、彼自身のことを口にして自分の孤独な生活を悔いつつ、「お前の生きかたが本当だ」と言ってもよかったです。しかし、もちろん彼はそうは言わなかった。この姪の生きかたがてんで間違っただけのだからです。彼女はろくでもない男と結婚し、その男が経済的な破産状態に陥ると、今度は夫を助けようと伯父のフローベールまで破産に追いこみました。カロリーヌの結婚は教訓、——フローベールにとっては暗い教訓となったはずです。

一見もっともらしい、しかし表層的な注釈ではあるまいか。たしかにフロー

ベールがどれほどの重みをこめてこの言葉を吐いたのかは分からない。一時の気まぐれや思いつきだったのかも知れない。また、姪の証言自体にどの程度信頼がおけるかも、その気になれば疑問符をつけられるだろう。しかし、この逸話がカフカやマン、三島に大きな印象を与えたのは、芸術家存在の根幹に関わるパラドックスがその中に暗示されていたからである。かりに姪の証言がでっち上げだったとしても、それは真実を表現する嘘に他ならなかったのである。

作者バーンズの認識力の低さは、第10章で最もよくうかがえる。語り手がフローベールを各種の非難から擁護した章だが、例えば「フローベール、人生と相渉らざりし罪」なる告発については、この作家をこう弁護している。

「そもそも人生という言葉で諸君は何を意味しておられるのでしょうか？（…）人と人との情のしがらみですか？ 家族や友人や愛人と相渉ることでギョスターヴはありとあらゆるしがらみを経験してはいませんか。あるいは、ひょっとして結婚を問題にしておられるのですか？ だとすると、今にはじまったことじゃないが、妙な告発もあったもんだと思います。結婚しているほうが独身であるより、いい小説が書けるとでもいうのでしょうか？ 子孫繁栄につとめた多産作家のほうが、子供のない作家よりもいい作家だとでもいうんでしょうか？」⁽⁵⁷⁾

「告発」の設定がまずいから弁明の方も幼稚に思ってしまうのだ。20世紀小説が19世紀に比べて世の人間から相手にされなくなったとするなら、この種の拙劣な言説のせいではないかと言いたくなるほどだ。作者の知的水準の驚くべき低さ！ 小説が認識の道具だとするなら、莫迦に小説が書けるわけがないからだ。一体誰が今どき小説の出来不出来が独身か既婚かにより異なるなどと思うだろう。まして、独身者の作品が質が低いなど？（語り手イコール作者ではない、という擁護は、ここでは恐らく成り立たない。語り手が作者によって十分に対象化されている痕跡は、この作品には見あたらない。）⁽⁵⁸⁾

この章からもう一例だけ引こう。「フローベール、芸術が社会的な目的を持つことを信ぜざるの罪」についての弁護だ。

「その通り、彼はそんなことは信じてはいませんでした。こういう御託宣にはもううんざりですな。『あなたの作品は哀しみをもたらしますが、私の作品は人

を慰めます』とはジョルジュ・サンドの言。これに対してフローベールはこう答えました。『自分の見方を変えるなどというのとはできない相談です。』芸術作品などというのは何の役に立つわけでもなく砂漠にそびえるピラミッドのようなもの、(…)とフローベールは言いました。芸術は何かの病いを癒すべきものとお考えなのですか？ それならジョルジュ・サンド救急車をお呼びになるがいい。』⁽⁵⁹⁾

相も変わらず「芸術のための芸術」理論。間違っていない。ただ、言われ過ぎてうんざりしてしまうのだ、少なくともバーンズのこの小説が書かれた20世紀後半にあっては。問題は、フローベールが「社会のための芸術」を書かなかったことにはない。フローベールとサンドのいずれが優れた小説家であったか、決着はすでについているからだ。むしろ今取り上げるべき問題は、「芸術のための芸術」を書いた彼が、なぜサンドのような人間との文通や交際を続けたいではいられなかったか、というところなのである。そこに踏み込まない作者は、20世紀後半に生きながら19世紀的な問題意識に踏みとどまっていると言うしかない。⁽⁶⁰⁾

19世紀的な問題意識？ そう、そもそも19世紀作家にとって結婚とは何だったのだろうか。

『ジキル博士とハイド氏』や『宝島』で知られる英国作家スティーヴンソンは1850年、すなわち19世紀の半ばに生まれたが、その彼に『若い人々のために』というエッセイ集がある。全4章からなり、全体が恋愛と結婚についての文章で占められている。その第1章「結婚について」で彼はこう書いている。

私たちは、昔の人にくらべると、人生というものにたいして、極度に臆病になっており、結婚したものがどうか、容易に決心がつかかねているのです。結婚は恐ろしい。しかしよるべのない寒々とした老年を迎えることも恐ろしいのです。男のつきあいというものは、たしかに気が楽でこの上もなく楽しいものですが、不安定な要素もまた同時に備えているのです。結婚でもしてしまえば、もうつきあわなくなってしまうかも知れません。〔その他、友情が失われる例を挙げて、〕こんなふうには人生というものは、あの手この手を使って男同士をひきはなし、美しい友情を永久に破壊してしまうのです。男の友情というものは、それが続いてい

る間は、融通がきき気楽なために都合のいいものですが、それだけ破壊されたり忘れられたりしやすい性質もそなえているのです。(…) だからといって、そのかわりに結婚しようというのは明らかに危険なことです。何人かの〔友〕人のかわりに、たった一人の人に自分の幸福を賭けるわけなのですから。(…)

しかし結婚というものは、安楽なものであるとしても、けっして英雄的であるとはいえません。それは心の広い男を偏狭にし、台なしにしてしまいます。結婚すると男はだらしく利己的になり、道徳的にも贅肉がついて動きがにぶくなってしまいます。(…) しかし女性の場合には、この種の危険性はずっと少なくなります。女性のほうは、結婚することによって男性よりも多くの利益を得、より広い人生に触れることができ、より多くの自由と利益を楽しむことができるので、その結婚に成功しようが失敗しようが、ともかくも損をすることがほとんどないからです。(…) 原則的には、男の中の男、いかにも女らしい女は、立派な独身の男性とすぐれた人妻の中に見出すことができるでしょう。⁽⁶¹⁾

今日の見解からすれば微苦笑を誘うに違いないこのシニカルな文章を、ステューヴンソンは二十代半ばに書いている。『若い人々のために』と題されたエッセイをしたためたのは、とうの昔に結婚した中年男ではなく、未婚の駆け出し作家であった。彼はスコットランドの著名な建築技師の一人っ子として生まれ、長じては父に反抗して文学者を志しボヘミアンの生活を送っていた。

以上のようなシニカルな結婚観は、何もステューヴンソンの専売特許ではなかった。そもそも19世紀ヨーロッパの作家や芸術家にあつては、結婚と家族は批判すべきブルジョワ的な制度であつて、独身を通すことこそ芸術家の純粋な生き方であると考えられていた。その結果、売春婦との交際による梅毒感染が独身文学者の宿命とすら捉えられたのである。⁽⁶²⁾ フローベールも、独身で梅毒に倒れた文学者の一人だった。次のような指摘もある。

文学上のボヘミアンは、ブルジョアの偽善に対するありふれた憎悪によって極左との連帯感を持ったのである。十九世紀末から今世紀初めにかけて、自由主義的の道徳観——自由恋愛、合法的墮落など——が、進歩的政治グループの間に広くゆきわたった。かれらは結婚式のために役所へ届出をしないことを誇り、お互いに「夫」「妻」と呼ばずに、「協力者（パートナー）」とか「伴侶（メイト）」とか呼ぶのを好んだ。⁽⁶³⁾

いや、結婚という制度に基づいた性生活と芸術家たることとの矛盾は、19世紀という時代の枠を越えて存在した。ミケランジェロは、なぜいつまでも独身でいるのかと訊かれ、自分には作品という子供がいるから結婚する必要がないのだと答えた、という話がある。⁽⁶⁴⁾ ゲーテがヴァイマルでの政治家生活に疲れて1786年ローマに逃亡した際、いかにイタリアならば結婚を前提としない自由恋愛が可能だという幻想に取り憑かれていたかは、近年イタリアの研究者により詳細に明らかにされている。⁽⁶⁵⁾ 16世紀に「芸術家＝創造的天才」という観念が社会から受け入れられた時に、彼らの性的放縦は芸術家の欠くべからざる属性として認知されたのだとも言われる。⁽⁶⁶⁾

芸術家活動は制度的な結婚とはそりが合わないという観念は、20世紀になっても恐らくはカフカに受け継がれている。だが同時に、20世紀は19世紀的な芸術家観念に反旗を翻した時代でもあった。トーマス・マンの『トーニオ・クレーガー』は20世紀における芸術と実生活との関係を暗示した記念碑的作品とも言えるのであり、この短篇が発表されて2年後に作者が結婚したことはその実践ですらあった。

こうしてみると、ステイーヴンソンのシニカルな結婚論は19世紀的言説の典型なのであって、若い作家は時代風潮に逆らわず無難にエッセイをまとめたことが分かる。

だがしかし、彼はこの文章を書いた直後、夫と別居し二児と暮らしている人妻ファニーに恋して、すったもんだの挙げ句どうにか結婚にこぎ着ける。この時彼は29歳。では、家庭に収まった彼の結婚観は変わっただろうか。結婚した直後に彼は「結婚について」の続編を書いて単行本として出版しているが、その中身は例えば次のような具合である。

[私は]あなた方が結婚することだけは、どうしても認めることができないのです。ばかなことをいうものではありません！ 自分一人生きて行くのさえうまくいかないのに、もう一人の人間の面倒までみようなんて、まったくの気狂いぎたではありませんか。(…) あなた方は自分の敵であるだけでなく、細君の敵にもならなければならないのです。(…) 結婚すると、男性にはすべての事情が一変してしまいます。横道にそれて、無邪気に道草の食える草原は姿を消し、長いまっすぐな埃っぽい道が墓まで通じているだけなのです。⁽⁶⁷⁾

自らの実生活がいささかも言説に影響を与えないということの好例であろう。もっとも、最後の段落に来てようやく新婚の著者は、《しかし、結局のところ、結婚からしりごみをする男は、戦場から逃げ出す男と同じようなものです》と述べて⁽⁶⁸⁾、様々な危険や失敗からも最終的には人間は生きていく希望を得るものだ、という消極的な結婚肯定論を提示して結論としている。

生涯独身で通したフローベールは、あくまで19世紀の芸術家然とした見解を保持したのだろうか。或いは、姪によるあの逸話にあるようにそれに疑問を抱いたのだろうか。多分、単純な結論は出し得ないだろう。たしかに彼は結婚に積極的な姿勢を示したことはなかった。⁽⁶⁹⁾ しかしそれは彼が結婚や家族を否定したことを意味するのだろうか。

例の逸話が残された晩年、彼は小説『ブヴァールとペキュシェ』を執筆しており、これが未完のまま絶筆となった。この作品では、タイトルにある主人公二人はともに47歳の独身男である。もっとも、ブヴァールの方は一度結婚した経験があった。「叔父」に連れられて田舎からパリに出、修業を積んで結婚し菓子店を開いたが、女房は半年後に資金をかつさらって姿をくらましてしまう。「叔父」が実は実父で、私生児であるブヴァールを体よく遠ざけてしまったわけであるが、この小説の導入部でその実父が死に、ブヴァールには莫大な遺産がころがりこむ。これを機に彼は友人ペキュシェを誘って数年後にパリでの仕事を辞め、ノルマンディーの田舎に屋敷を購入して移り住む。そして農耕や園芸を手始めとしてありとあらゆることに手を出しては失敗するというのが、この奇怪な小説（私は、中年男が主人公であることとあらゆる試みが失敗に終わる点で、逆教養小説と呼びたい）の筋書きである。隠居生活を始めてまもなく、ペキュシェの方は童貞であることが判明する。その彼も以前一度洗濯女と世帯を持ちかけたのだが、相手が他人の胤を宿していると判明して取りやめになってしまったのである

だが、二人が試みる諸事の中には、やがて結婚も含まれることになる。第7章でブヴァールは近所の未亡人との結婚話を進めるが、財産分与を要求されて拒否したために悪口雑言を投げつけられた挙げ句破談となり、ペキュシェは若い女中に手を出して童貞を失うが、性病を伝されてしまう。結末はこうである。

彼らは女について流布されているあらゆる常套語を並べたてた。
 女をもとうなどという欲望から、二人の友愛はとぎれたのだ。彼らは後悔した。
 「もう遊びなんかやめにしような？ 女なんかになしに暮そう！」
 そして二人はやさしく抱きあった。⁽⁷⁰⁾

だが、結婚を断念しても家族づくりはまた別である。母を亡くし父は徒刑囚という孤児兄妹が近隣にいた。第9章の終わりでペキュシェは妹の方を見て、

そのブロンドの髪の毛や、愛くるしい様子を眺めて、こんな女の子が自分にもないことを淋しく思った。(…) こんな娘が成長してゆくのを眺め、小鳥のようなお喋りを毎日耳にして、気の向いた時には接吻もしてやれたら、どんなに嬉しいことだろう！ こう考えると、胸にこみあげて来る感動に、彼の瞳はうるみ、心を締めつけられる思いがした。⁽⁷¹⁾

そこで二人はこの兄妹を引き取って教育を試みる、というのが第10章の粗筋だが、知育も徳育もうまくゆかず、「親の血は争われない」⁽⁷²⁾ と考えざるを得なくなる。兄は暴力癖や盗癖を示し、妹は僱傭の仕立職人と同衾してしまう。結局二人が出した結論は、

孤児たちは、技術らしいものを何ひとつ身につけていなかったから、召使の口を捜してやることにした。その上でさっぱり手を切ろう。ありがたいことだ！⁽⁷³⁾

結婚も家庭づくりも彼らにはうまくいかない。しかし肝心なのは、そこからフローベールの結婚観を結論づけることではなく、この作品と晩年のあの逸話やサンドとの交友との間にある距離をどう捉えるべきかを考えることだろう。ハインリヒ・マンはフローベール論の中で、このフランス作家は晩年にサンドの意見に従って人間性を肯ったのだと述べた。⁽⁷⁴⁾ 一方でフローベールの芸術性をあくまで擁護する見方もある。⁽⁷⁵⁾ 実際はどうか。

多分、結婚や家族ということにおいては、それを生きることと文字として表現することが乖離せざるを得ないという事情の中に問題があるのだ。北村透谷やステューヴンソンに明確に看取されたように、シニシズムの対象にされやすい部分が結婚や家族にはあり、フローベールも小説を書くにあたっては彼ら

と軒を並べるかのように見えた。異なっていたのは、フローベールが彼らと違って「恋愛結婚」もしなければ、カフカのように弱者の権力性によって絶えず女を確保しておくという道もとらなかったことである。無論、「見合い結婚」からも彼は遠かった。そのことによって逆に、安易な肯定も全否定も共に不可能なやっかいで複雑な領域があるということ、フローベールは感じるようになったのではないか。小説と彼の交友や逸話との乖離は、そうした複雑さがしばしば二極分解の形で表現されることの謂なのではないだろうか。

ちなみに、あらゆるものを嘲笑し皮肉ったフローベールの真骨頂を示しているはずの『紋切型辞典』には、「結婚」も「家族」も含まれていない。

註

- (34) 『決定版カフカ全集』第6巻(前田敬作訳), 398頁以下。Franz Kafka: Das Schloß(Gesammelte Werke hg. von Max Brod). S.530
- (35) 『決定版カフカ全集』第7巻(谷口茂訳), 224頁。Franz Kafka: Tagebücher 1912-1914(Gesammelte Werke in 12 Bänden nach der Kritischen Ausgabe hg. von Hans-Gerd Koch, Frankfurt am Main. 1990 Bd.10). S.184
- (36) 同上, 364頁。Kafka: Tagebücher 1914-1923(hg. von Koch). S.136f.
- (37) 『決定版カフカ全集』第11巻(城山良彦訳), 430頁。Kafka: Briefe an Felice(hg. von Brod). S.460
- (38) 同上, 426頁以下。Ibid. S.456f.
- (39) エリアス・カネッティ『もう一つの審判——カフカの「フェリーツェへの手紙」』(小松太郎・竹内豊治訳, 法政大学出版局, 1971年)
- (40) 『決定版カフカ全集』第7巻, 206頁。Kafka: Tagebücher 1912-1914(hg. von Koch). S.79
- (41) ネイハム・N・グレイツァー『カフカの恋人たち』(池内紀訳, 朝日新聞社, 1998年) 83頁。
- (42) 『三島由紀夫全集』第28巻, 138頁。
- (43) ヴァーゲンバハ『カフカ』(塚越敏訳, 理想社, 1967年) 79頁。Klaus Wagenbach: Kafka. rororo. 1964 S.63

- (44) 註18参照。
- (45) 『三島由紀夫全集』第28巻，372頁。
- (46) 同上，368頁以下。
- (47) 細谷博『太宰治』（岩波新書，1998年）54頁以下。
- (48) 筑摩書房全集類聚『芥川龍之介全集』第7巻，1971年，99頁以下。なお句点がないのは原文のまま。
- (49) 『侏儒の言葉』（『芥川龍之介全集』第5巻，1971年，100頁。）
- (50) 勝本清一郎（校訂）『北村透谷選集』（岩波文庫，1970年）87頁。
- (51) 作田啓一『個人主義の運命——近代小説と社会学』（岩波新書，1981年）
- (52) 『明治文學全集第29巻・北村透谷集』（筑摩書房，1976年）354頁。
- (53) 菅野聡美『消費される恋愛論——大正知識人と性』（青弓社，2001年）63頁以下。
- (54) 同上，65頁以下。
- (55) ジュリアン・バーンズ『フロベールの鸚鵡』（斉藤昌三訳，白水社，1989年）なおこの訳書では「フロベール」と表記しているが，本論考では引用に際して「フローベール」と改めてある。
- (56) 同上，153頁以下。
- (57) 同上，199頁。
- (58) 正反対の例を挙げておこう。いささか位相を異にするが，磯田光一は，井上光晴宛て書簡という形式で書いた批評において，井上の或る作品で主人公（＝自称作家）が被害者としてしか描かれていない点を捉えて，次のように述べている。
- 「ただ一つだけの最終的な不満を言えば，この寛大な戦後社会は，作家を利用することはあっても，迫害することなどはありえないということにあなたが気づいていないか，あるいは気づいていても故意に語るのを避けているということです。作家の自己批評はそこまでとどいてほしいと，と私はいいたいのです。（…）作中の自称作家を被害者と設定した点に，私はむしろ甘さを見ます。どちらにころんでもスター的存在たらざるをえないという状況のうちにこそ，むしろ文学芸術の危機の現代的基盤があると私は思うのです。そしてこの危機感を創作意識の中に繰り込んで自己批評の契機たらしめる以外に，作家として現代の社会に迫ることは不可能だ，とあえていしましょう。」（磯田光一『悪意の文学』読売新聞社，1972年，101頁。）
- (59) バーンズ『フロベールの鸚鵡』207頁。

- (60) いささか蛇足ながら、サルトルは、彼の未完に終わった分厚いフローベール論『家の馬鹿息子』を「小説として読んでほしい」と語り、これは「真実の小説なのだ」とも語った。(ジャン＝ポール・サルトル『家の馬鹿息子 第1巻』平井啓之ほか訳、人文書院、1982年、715頁。) 小説家を解剖することは小説によってしかできないということであろうか。しかしバーンズのごとき知性が小説でフローベールを語るなら、小説の権威は地に墜ちるしかあるまい。
- (61) ロバート・ルイ・ステイーヴンソン『若い人々のために—恋愛と結婚について—』(守屋陽一訳、旺文社文庫、1966年) 10頁以下。
- (62) 鹿島茂『文学は別解で行こう』(白水社、2001年) 95頁以下。
- (63) レイモン・アロン『知識人とマルキシズム』(小谷秀二郎訳、荒地出版社、1970年) 64頁。
- (64) エルンスト・クリス／オットー・クルツ『芸術家伝説』(大西広ほか訳、ペリカン社、1989年) 169頁。
- (65) ロベルト・ザッペリ『知られざるゲート——ローマでの謎の生活』(津山拓也訳、法政大学出版局、2001年)
- (66) クリス／クルツ『芸術家伝説』171頁。
- (67) ステイーヴンソン『若い人々のために』33頁以下。
- (68) 同上、41頁。
- (69) 以下を参照。ハインリヒ・マン『ギュスターヴ・フローベールとジョルジュ・サンド』(拙訳、「新潟大学教養部研究紀要」第24集、1993年) 74頁以下。
- (70) フローベール『ブヴァールとペキュシェ』(鈴木健郎訳、岩波文庫、1954～55年) 中巻、119頁。
- (71) 同上、下巻、62頁。
- (72) 同上、下巻、101頁。
- (73) 同上、下巻、121頁以下。
- (74) ハインリヒ・マン『ギュスターヴ・フローベールとジョルジュ・サンド』86頁。
- (75) 拙論『マン兄弟の確執(その7)』人文科学研究第94輯、1997年、95頁以下。